

A SUPERNATURAL WAR

スーパナチュラル・ウォー

第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰
MAGIC, DIVINATION, AND FAITH DURING THE FIRST WORLD WAR



Owen Davies
オーウェン・デイヴィス [著]
Koretaka Eguchi
江口之隆 [訳]



愚かな妄信か、愛する人を守るための最後の命綱か
全世界で死傷者1800万人超——未曾有の大災厄から生まれた無数の
ウォー・フォークロア
伝承・呪物で紡ぎ出す、かつてない〈戦争民俗学／戦争社会史〉の名著

目次

凡例 6

序文 7

第1章 驚異に満ちた戦争 10

第2章 予言の時代 29

昔の予言、いまの予言 31

あふれでる現代の予言者たち 42

星を眺めて 52

アルマゲドンと新たな世界秩序 61

ドイツ皇帝の数字…666 72

第3章 ヴイジョン体験、霊、そして霊能者たち 81

天上のしるしと聖なる出現 82

マリア出現 92

白い仲間 98

とりつかれる場所、とりつかれる人々 103

心霊術と戦争 110

戦場の霊たち 119

心霊戦 127

予知 134

第4章

占いさまざま

142

占いという仕事

144

魔術代行

150

占い師掃討キャンペーン

153

女性の問題

162

看板に偽りあり

167

魔女術取締法

177

ウォー・ストーリーズ

183

第5章

戦場の幸運

191

不運を回避する

193

流行するお守り 197

卵膜の売買 208

クローヴァーの戦い 210

あちらこちらに鉤十字 214

動物の魔術 218

小さな神々を製造する 225

第6章

塹壕の信仰と護身のお守り

248

防弾聖書 251

天国からの手紙 257

カトリックの武器庫 270

諸聖人と聖人崇拜 280

ニューソートと防弾思考 285

第7章
余波
305

訳者あとがき
325

付録1 本書関連地図
335

付録2 本書関連年表
337

原注
375

図版出典一覧
376

事項索引
379

人名索引
381

装丁 櫻井 浩 (©Design)
校正 麦秋アートセンター

本文仮名書体 文麗仮名(キャップス)

凡例

- ・本書は以下の書籍の全訳（索引は一部省略）である。
Owen Davies, *A Supernatural War: Magic, Divination, and Faith During the First World War*, First Edition.
(Oxford University Press, 2018).
- ・本文中の「」内の部分は原著者による補足を示す。
- ・本文中の「」内の部分は訳注を示す（注番号は除く）。
- ・本文中の聖書の文言は『聖書』（日本聖書教会、1974年）から引用した。
- ・本文の一部に今日では差別的表現とされる用語があるが、参照文献の当時の状況に鑑みて、そのままとしている。

序文

ドイツがUボートによる商船への無制限攻撃を再開し、アメリカを挑発して参戦へと向かわせることになる1917年、著名なドイツの社会学者マックス・ウェーバー（1864～1920）は潜水艦戦略と戦略全般を遠慮なく批判して名声を博しつつあった。しかし同年11月のある日、ミュンヘン大学にて「職業としての学問」という講義を行うウェーバーの頭のなかでは、戦争は最大関心事ではなかった。いならば聴衆のなかには前線で軍務を終えてきた学生たちもいた。話題はやがて「世界の脱魔術化」に向かつていった。ウェーバーは1913年発表のエッセイではじめてこの言葉を用いており、当初の意図が非合理であつても行動は合理的になり得ると論じていた。講義は進み、「脱魔術化」は西洋世界の発展におけるひとつの段階であるという自説が展開された。400年におよぶプロテスタント主義という特殊影響下にあつて合理性はひとつの体制となり、社会は外見的世俗と官僚体制という形で近代化されたという。もはや魔術や奇跡と交流を持つ必要はなくなった。「魔術がそれまで果たしてきた奉仕を技術と計算が行うようになった」からである〔注1〕。ウェーバーの論は歴史家た

ちの近代社会発展論に巨大な影響を及ぼすことになった。

しかしその一方でドイツにはびこる魔女術や魔術に対して掃討キャンペーンを開始する若者たちもいた。そのひとりがヨハン・クルーゼ（1889～1983）、1915年に疾病除隊となった学校教師である。12歳の頃、クルーゼは母親が近所の老婆を慰めている様子を目にしている。地元の農夫から魔女と罵られ、殺してやると脅されたのだという〔注2〕。このことがきっかけとなり、不当に虐げられた女性を擁護し、また魔術を売り物とする者たちへのキャンペーンを始めることにしたという。クルーゼはその決意を1923年に発表した『現代の魔女術迷妄』にて明らかにしている。この「問題」はドイツだけのものではなかった。1915年2月、英国のフォークロア研究者キャサリン・パーソンズは地元ケンブリッジシャーの生活に関する講演を行った際、「教区の人々は幽霊を本物であるかのように語る。迷信はふんだんにあり、村のワイズウーマンのことも昨日のことのように覚えている……魔女はいつもいたし、これからもあるだろうと口にする」と述べている〔注3〕。英国の一般大衆が野蛮なドイツ人やその残虐行為に関する出所不明の噂話に興じているさなか、一部の人間にとっては魔女術は同じくらいホットな話題だったのである。1915年、スコットランド某紙のドイツ特派員報告によると、同地では「科学と文化を前面に押し出してはいるが、魔女と魔法使いはまったく絶滅していない」そうで、魔女が牛からミルクを盗んだという苦情がいまだに山のように寄せられる地域もあるという。1916年11月『モンマス・ガーディアン』紙にはウェールズ人がいまだに魔女術の実効を信じ続けていると悲嘆する書簡が掲載されている〔注4〕。とあるウェールズの討論クラブでは、最初の論題は「政府の方針に対する良心的異議申し立ては正当か否か」であり、次に論じられたのが「魔女術の実効を確認するに十分な証拠はあるかないか」であった。後者は白熱の議論の果

てに退けられたという「注5」。世界大戦は遠い世界の話のようであった。

人々がいまだ魔女を恐れているさなか、ヨーロッパはどうして脱魔術化ができたのか？ たしかに第一次世界大戦はウェーバーが描いた技術的かつ官僚体制的社會の極致そのものであったかもしれない。空爆、飛行船ツェッペリンの空襲、潜水艦、毒ガス、戦車が登場する争いにおいて、魔術にどのような必要性があったのだろうか？ 魔術の實在を人々が信じ続けていたという事実は、1914年から1918年のあいだに語られるべき別の歴史があるというひとつのしるしにすぎない。人の心のより深いところにある謎やさらに別の領域に関する歴史もまた歴史である。本書をお読みいただければ、超自然が戦争体験に関して多くを教えてくれること、また戦争が超自然体験に関して多くを教えてくれることをご理解いただけるだろう。

第1章 驚異に満ちた戦争

「塹壕生活に関する迷信に敬意を払わなかった者などいない」

(ベニート・ムッソリーニ、1915年11月)〔注1〕

人間集団が危機に遭遇すると、およそ常識や理屈では不可能と思われるような異常経験が個人レベルさらに国家レベルで多発する。第一次世界大戦も例外ではなかった。この戦争を通じて人類は秘められた神秘の局面へ向かうとか、いまこそ人類の精神的あるいは心霊的運命が左右される不安定な瞬間であるとか、当時はそういった感覚で捉えられていた。かの悪名高い1914年の「モンスの天使」事件、すなわち中世の弓兵の幽霊が戦場に出現したといった超自然現象が報告され白昼堂々論じられるなど、それまでの国家的風景では考えられない事態であった。交戦各国の教会、オカルト関係者、心霊調査者たちがこの事態を影響力拡大のチャンスと見る一方、一般大衆は戦争という現実に対処すべく伝統的あるいは珍奇な手段を講じていた。交戦各国をつなぐ超自然的な連環を追っていくと、

魔術や宗教や科学が第一次世界大戦という近代の坩堝くわうにあつて心地よい同伴者であつたことが明らかになるのである。

第一次世界大戦が世界初の科学的闘争と称されるのは、交戦各国の軍部が次々と展開される革新的技術を採用し、戦争支援が触発した医学、工学、物理学、化学における進歩も組み込んでいったからである。欧米に出現した各種の社会科学はこの戦争を人間行動と信条を理解するうえでのこのうえない機会、究極的には人間の本質を明らかにするチャンスと見なしていた。フランスとベルギーの戦場は社会的、心理学的、人類学的調査のためのユニークな実験室と思われていたのである。機械化された大規模戦闘行為にはじめて直面する人類がいるのである。その肉体的精神的忍耐の極限状態、精神的外傷のストレスと症状を研究するうえでこれ以上の環境があるだろうか。こういったアカデミックスな関心もたらした一番有名なものは戦争神経症関連の研究である。しかしそれほど関心を集めずに今日に至っている社会科学分野もある。

心理学は1870年代のドイツにおいて学術対象として確立している。第一次世界大戦は日が浅い学問にとって大学内での地位を固めるための絶好の機会であり、自らの価値を国家に、とりわけ軍産複合体に例示するチャンスとなった。たとえばドイツの心理学者たちは従業員の労働適性や兵士の戦闘適性を見るための心理テストを積極的に考案している。応用心理学者にして前線将校であつたパウエル・プラウトは自身で行つた戦場の観察、さらに戦争開始時に行つたアンケート調査等を用いて精神的危機に関する理論を構築している。プラウトによれば、精神的危機はさまざまな形で現出するのであり、そのなかには「迷信」的遵守や儀式も含まれるという^{注2}。しかし戦争中、というか戦争のおかげでアメリカがドイツにかわつて心理調査の原動力となつた。1920年代、全世界で発表され

た心理学論文の3分の1はアメリカの学者あるいは専門家が記している〔注3〕。アメリカが1917年4月に参戦するまでは、同国の心理学者たちは軍人や銃後の民間人の精神的葛藤に関して公正かつ偏見のない立場で査定が可能であると自負することができた。たとえば1915年、ジョージ・ワシントン・クライルはフランスにおいてアメリカ応急処置団の部隊を指揮する機会を得て、これに飛びついた件を記している。もちろん慈愛的精神の発露ではあったのだが、そこにはかれのテーマであった「最大の感情的肉体的ストレス下で戦闘がもたらす肉体的影響」、また兵士たちの不眠症や極限的疲労の調査をさらに進めたいという思惑もあったのである〔注4〕。

アメリカの心理学者たちは同時代迷信の研究を学術分野として確立した先駆者でもあった。1907年、教育心理学者フレッチャ・バスコム・ドレスラーは学童875名が有する迷信について大規模な調査を行い、結果を発表している。その目的は「精神進化の残余をもっともよく保存する暗いヴェールで覆われた興味深い領域、またわれわれの現在の行動の主因となっている民族的衝動を探索すること」にあった〔注5〕。戦時中にも同様の調査が行われており、なかには1913年から1917年にかけてオレゴン大学の心理学専攻の1年生を対象に4年間続いた迷信調査というものもあった〔注6〕。この種の調査は同時期の軍人にまで及ぶものではなかったが、アメリカの心理学者たちは英国やフランスから発せられる幻視体験や心霊術集会の報告には敏感に反応しており、その意味や意義に興味津々であった。1916年、アメリカの児童心理学の先駆者にして優生学者、さらにアメリカ心理学協会の初代会長であったグランヴィル・スタンリー・ホールが「戦争に関する心理学的覚書」において、「モンスの天使」を驚くべき妄信の一例とし、戦時におけるストレスと懸念の表現として非常に興味深いと述べている。「これほど神経に負担を与える戦争はかつてなかった」〔注7〕。アメリ

カの『教育心理学ジャーナル』1918年5月号の巻頭言は当時の宗教的感情の昂揚と社会全体を覆う陰鬱感を嘆いている。そういった雰囲気の中で「英国とフランスの知識階級にあってすら妄信という人間の弱点が力を増し、心靈的顯現をうたう証言を鵜呑みにしつつある」。心靈術や心靈現象に関する文献が洪水のようにあふれていて、両国の「無批判な大衆」に有害かつ永続的な心理的影響を及ぼしかねないとしている〔注8〕。

一般大衆の戦争に対する準備、および戦時下での生活を大衆心理学の一面として研究した人としては、英国の社会心理学者ウィルフレッド・トロッターなどがいる。トロッターの『戦争と平和における集団本能』（1916）は成功を収めた著作であるが、このなかにおいてドイツは「完璧な攻撃集団」として狼にたとえられている。一方英国はミツバチの行動をモデルとする「社会化された集団」である〔注9〕。心理学者と社会学者は交戦国国民のあいだで広まる流言飛語の性質と影響に関心を抱いていた。こういったものもまた、迷信と同様、白日のもとにさらせば戦時における集団妄信と同系列の類と見なされたのである。現在われわれがフェイクニュース、バイラルニュース「インターネット上での拡散を意図的に狙って流される面白情報や時事ネタなどのニュース」と呼んでいるものは一世紀前でも社会問題であった。例をあげるとすると、無数のスパイ・パニック、ベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為の誤報、アメリカ沿岸をツェッペリン飛行船が空爆するという噂などがある。ロシア人が万単位でスコットランドの港に上陸しているとか、ドイツ皇帝が死去したとか自殺したとか、そういった噂が定期的に流れていた。ドイツ人もまた、ロンドンが震災に襲われたといった話を耳にしていた〔注10〕。戦争の初期段階、前線あるいは後方で軍医として勤務していたルシアン・グローはこの種の噂やフェイクニュースをできる限り収集しておこうと決意した。一部は兵士たちから直接聞き取っ

ているが、大部分は新聞等の印刷文献から集める二次的なものである。グローの動機は戦時における樂觀と悲觀の心理調査というものであった。結果として1918年、数巻におよぶ膨大な出版物が出現している〔注11〕。この話は同じフランス人マルク・ブロックを魅了し、精神状態の歴史という先駆的研究に向かわせることになった。ブロックは歩兵連隊の軍曹として徴募され、のちに大尉にまで昇進し、勇敢をもってレジオンドヌール勲章を授与された人物である。かれはグローよりも感受性に富み、知的に洗練された視座を持っていた。いわくグローの大冊は「あちこちから借りてきた寄せ集めの冗長なアンソロジー」にすぎないとしている。ブロックにとっては、塹壕で直接聞いた噂こそが目撃者の心理に関する魅力的な洞察であり、伝説やゴシップや伝聞が生まれて広まる仕組みを解説するものであった。「歴史を回想する者にとって、これ以上に魅力的な疑問はない」と1921年にブロックが記している〔注12〕。軍部による検閲といいかげんな郵便連絡のおかげで、塹壕では「口頭伝承が素晴らしい形で更新されていく」というのがかれの持論であった。前線での生活は文字がない時代を生きているかのようなようだった、とブロックは感じていた。他の方法では体験できないような大衆文化の歴史を学ぶユニークな機会を提供されたといってもよい。現場でも、あとから回想しても、塹壕での噂や伝承の伝播において印刷物はきわめて重要な役割を果たしていた。兵士たちの手作り新聞もまたゴシップや自作の歌、伝承や噂を広めるためのメディアであった〔注13〕。

「戦争から生じた迷信、あるいは戦争によって復活した迷信には別個の研究が必要である」とブロックはいう。「ドーザ氏はそういった迷信に重要な場を与えている」。ここに登場するドーザとはフランスのアルベール・ドーザ、1918年に戦争が生み出す伝聞、伝説、予言、迷信等に関する社会心理学研究書を出版した言語学者にしてフォークロア研究者である〔注14〕。この書物は第一次世界大戦に

まつわる超自然信仰をまとめた最初の、そして現在に至るまでほぼ唯一の研究書であった。取材対象は大部分がフランス人であるが、英国、スイス、ドイツの新聞や研究報告といった関連資料も網羅されている。心理学者同様、ドーザにとっても幻視や幽霊、予言、護符着用などはすべて妄信の類であって、脆弱あるいは感情的な頭脳がストレスにさらされた結果生じる古ぼけた恐怖心や迷信でしかなかった。しかし生理や心理といった観点を超えた立場に立つと、ドーザのようなフォークロア研究者が妄信に見られる信仰やより深い文化的意味に対して興味を抱くのはほぼ本能のようなものだった。

ヨーロッパの一部の人類学者とフォークロア研究者（両者はときどき絡み合う）もまた、第一次世界大戦を唯一無比の実験場とみなしていた。19世紀半ばに欧州各地で出現したフォークロア運動は、発足当初から農村部の迷信収集が実践的活動の主軸のひとつであった。1914年頃になると、魔術や魔女術、予兆や幽霊に関する信仰が連綿かつ広範囲に保たれていることを示す証拠に不自由することはなくなった。かれらのフォークロアに対する関心は心理学者のそれと重なり合っていて、超自然に言及する際の態度はときに及び腰であったが、フォークロア研究者は迷信を別の文脈から考察していて、研究の目的もまた異なっていたのである。バイエルン語辞書編纂事業の責任者であったドイツ人オットー・マウザーは1917年に熱弁をふるっている。「人文科学数あるなか、戦争がもたらす多様な顕現を個別に観察して収集する役割はフォークロアの双肩にかかっている」〔注15〕。迷信とともに収集されたものとしては、民謡、伝説、宗教的遵守、俗語などがある。また戦争という異常な条件下、異常に親密な集団生活を余儀なくされた男たちのあいだで発生した思想や信仰、表現などの伝達に関する物証も収集対象であった。たとえばイタリアのフォークロア研究者たちはイタリアのさまざまな辺境から集められた兵士たちによる文化交流に特別の関心を抱いていた。戦時捕虜キャンプもま

たフォークロア研究者と人類学者にとってヨーロッパの人種的特徴の精査をする実験室を提供するものといえた（もともたけらは植民地から集められた何百万人もの非ヨーロッパ系兵士にはほとんど興味を示していない）。

当時、フォークロアと人類学には強烈な発見収集衝動が存在していた——いわば不可解なるものを集める考古学者のようなもので、人類社会初期から残存している信仰や崇拜行為、伝統などを先史時代からの精神的化石とみなして収集したのである。世界中の部族がまだ原始的魔術とトーテム崇拜の段階にとどまっていると見なされる一方、ヨーロッパでは一部の無教育貧民が精神的化石を断片的に保持している、あるいは大衆にあつては休眠状態に入つて久しいと考えられていた。第一次世界大戦が創出した状況はこの種の「原始的」傾向を再覚醒するもの、あるいは再浮上させるものと思われたのである。安楽椅子タイプの学者は証拠を探して各種報道を洗い直していたが、なかには戦場に出て過去の遺物が実際に動くさまを垣間見た人もいた。たとえばアメリカの人類学者ラルフ・リントンはアメリカ外征軍（AEF）第42「レインボー」師団に参加してフランスの前線で実際に戦つていて、そのときの体験をもとに「現代」社会における原始的トーテム行動の創出を探求している。兵士の一団が非公式の徽章や遵守事項を生み出したり、マスケットを採用する様子などは格好の観察対象であった。とある「ヒステリーのぼんくら」兵士は予知能力を持っているとされていて、それを知る下士官たちによって来るべき攻撃を予知しているあいだは通常任務を免除されていた。リントンはこの行動をオーストラリアのアボリジニやメラネシア人、北米の部族系トーテムズムの研究と比較し、アメリカ外征軍の心理構造と「原始的」トーテムイズムは「同種の社会的超自然的傾向」が生み出した物と結論している「注16」。

スイスのフォークロア研究者たちは戦争フォークロアという新分野を開拓した先駆者である。第一次大戦中、同国は中立を保持していたが軍隊は動員しており、戦時捕虜収容所を開設していた。国境沿いでフランス、イタリア、オーストリアとドイツが争い合う状況では、いかに永世中立国スイスといえども疑心暗鬼と緊急対処に無縁でいられるはずもなかったのである。1915年、スイスのフォークロア協会（1896年エデュアルド・ホフマン＝クライヤーによって創立）はスイス軍の支持を取り付け、軍事戦略政治専門誌『スイス軍事批評』誌上でドイツ語の質問調査票を配布している。この調査票はフランスの雑誌にも転載され、イタリア語にも翻訳された。この調査票は多言語および多人種が混在するスイスという環境を背景とした兵士を対象としたもので、13項の質問で構成されていた。なかにはどのようにして生命を守るかといった質問も含まれている。メダイ、祝福された物品、お守り、魔術的物品といったものを所持しているか？ 兵士が採用する民間治療はどのようなものか？ 戦争を予兆する事項はどのようなものがあるか？〔注17〕この企画はホフマン＝クライヤーとスイスのフォークロア研究者ハンス・ベヒトルト＝シュトイブリが考案したもので、後者は戦時中は軍の検閲官として勤務していた。集まったデータから一連の小規模刊行物が生まれ、最終的にホフマン＝クライヤーとベヒトルト＝シュトイブリ編集になる『ドイツの迷信案内』という記念碑的作品が戦後に出版された〔注18〕。

スイスのプロジェクトは交戦各国を結ぶ連携役を果たすこととなった。ベヒトルト＝シュトイブリは迷信を発見するたびにドーザと連絡を取り合っており、スイスに主導権をとられていたのがくやしかったのか、ドーザもまたフランス軍兵士のあいだで用いられている独特の符丁に関して調査票を配布することにした。このことはドイツとオーストリア＝ハンガリーのフォークロア研究者たちを刺激

し、各地方に無数のフォークロア研究者やフォークロアクラブを生み出す結果となっている。かれらの興味の対象は迷信よりはむしろ民謡や音楽、民芸や壱壕俗語などであった〔注19〕。この種のものはイタリアの熱心な戦争フォークロア研究者にとっても人気のある項目だったが、一部のイタリアのフォークロア研究者は壱壕宗教や民間魔術に注目し、その伝承や物的創造に関する重要な収集を集積しつつあった〔注20〕。もつとも影響力を発揮したのは心理学者にして従軍神父であったアゴスチノ・ジエメリ（1878～1959）である。かれは学術的関心もさることながら、聖職者としての懸念もまた研究の大きな動機となっていた。神父にとって、前線で行われる迷信や歌唱は「わが軍の兵士たちの素朴な魂」に対する最新の洞察を提供したのである。しかし調査結果で判明したものは、原始的かつ劣等と思われる妄信の類であり、「真の信仰」によって対抗すべき代物ばかりであった。そのため神父は野戦病院や戦闘区域で新たな宗教復興キャンペーンを開始した。〔In hoc signo vinces〕（このしるしのもとに征服せよ）、および「protezione del soldato」（兵士の防護）という標語を記した三角形の布を配布し、胸元に着用するよう奨励したのである〔注21〕。

当時、ジエメリの最大の論敵のひとりがラファエル・コロソ（1885～1965）であった。コロソはジエメリとドーザの社会心理学的アプローチを攻撃しており、とりわけ重要だったのは当時支配的だった戦争劇場論を批判した点にある。すなわち戦争が新たな迷信や再発型迷信のためのユニークな舞台を提供したという見解を否定したのである。コロソにいわせると、兵士が実践している民間魔術や迷信は当時のイタリアの農村部で広く行われ浸透していた迷信の表現にすぎず、「戦時の風に乗って田畑から戦場へと運ばれ、そこで芽吹いて花咲いたもの」であるという〔注22〕。ユニークな実験室など存在しなかったというのである。コロソは民間魔術信仰を貧困層や無教育層に浸透した原始的

偏見の表出と見なしていた。こういった中傷の見解はさておき、コルソは国中に広く浸透した民間魔術への固執と塹壕で記録された証言の二者を組み合わせ、「戦争フォークロア」もまた単なるフォークロアであると理解した数少ない研究者のひとりである。

戦時の民間伝承という豊かな源泉を離れ、次に渇水状況に向かおう。1918年、ドーザが戦時の信仰や民間伝承に関する学術文献を調査した際、イタリア、スイス、フランスやドイツの研究を参照することができたが、英国に関しては「報告すべきものがない」と語るのみであった〔注23〕。実態はまさにその通りだった。戦時中のフォークロア協会会報をどれほど調べても戦争関連の記述はほとんどないのである。同会会長のロバート・ラヌルフ・マレットは1914年にオクスフォード社会人類学部を創立した人物であるが、会報の年頭挨拶でも戦争に触れこそすれ、戦時の行動や信仰が有するフォークロアの側面にはまったく言及していない。1915年3月に発表されたマレットの講演「戦争と野蛮」では、「およそ科学に関心を寄せていような雰囲気ではない。わたしたちの心は戦争に集中している」と述べ、それから野蛮の意味に関して世界の文化的見解を紹介している〔注24〕。その後の講演でも戦争の悲劇に若干脱線気味に触れはするが、抽象的な哲学用語を使うだけである。戦争終盤での講演では「戦争によってあらゆる層で復活した迷信を収集している人々」に少しだけ言及し、「英国もまたその原始的無邪気のなにかを再び捉える余裕を持てるかもしれない」と余韻を残して終わっている〔注25〕。当時の人類学関係の主要な組織たとえば英国科学進歩連盟や王立人類学研究所以、さらにそれらの機関誌を調べてみても、戦争はせいぜい遠い関心事であって、学術的可能性をほとんど認めていない印象である。少数の自然科学系人類学者たちが戦争関連に自分の研究を応用し、闘争における人種的基盤や英国人とチュートン人の人種的差異の精査といった活動を行っていた〔注

英国で行われていた広範な戦争フォークロア研究は、ロンドンの銀行の出納係にして護符コレクター、さらにアマチュアのフォークロア研究者であったエドワード・ローヴェット（1852～1933）が行っていたものであった。かれは戦時中、何度も何度もドックや市場やイーストロンドンの裏通りに足を運び、さまざまな民間伝承を収集していた。その豊富さは故郷のクロイドンや南部地方の伝承に匹敵するものとなっている。1916年12月、ローヴェットはロンドン南部のホーニマン博物館で「迷信に対する戦争の影響」と題される講演を行っており、収集したチャームやマスコットについて語っている。そういったものの戦時での人気は「200年前に回帰する運動」であるという〔注27〕。後年ローヴェットは当時唯一の都市伝説を専門に扱う書物『現代ロンドンの魔術』（1925）において、戦時中に国内で遭遇した兵士多数が新たな洞察や情報を提供してくれたと書いている。たとえば南部海岸地方に赴いたとき、「負傷から回復中の兵士2名がベンチに腰かけていたので、煙草を差し出しながら横に座り、事情を説明して話を聞かせてもらった」。こうしてかれはチャームや護符に関する情報を聞き出している。またあるとき、イーストクロイドン駅で列車を待っていると前線で負傷して本国送還となっていた友人を見つけている。いつも通りに話を始めたあと、ローヴェットはさりげなく切り出すのである。「ところでわが軍の兵隊が持ち歩いているお守りやマスコットに関して調べているんだ。なにか知っていたら教えてほしい」。またあるとき、モニュメントからファリンドンに向かう地下鉄に乗っていたとき、行き先がわかっていないとおぼしき「植民地出身の兵士」とたまたま会話状態になった。すなわち情報収集のチャンスである。ローヴェットは道案内をする一方、どうやら前線に送られる兵士であるとみて、チャームやマスコットを持っているかどうか質問し

ている〔注28〕。系統だった調査や質問票があったわけではなく、心理学的な理論構築もなかったが、ローヴェットのさりげない人情味ある伝承収集法のおかげでマスコットやチャームが個人にとってどれほど意味があるのか、きわめて価値の高い洞察が入手できたといつてよい。

英国では、心靈調査協会（SPR）だけが戦争の超自然的側面に関して調査を行う学者や研究者の組織であった。フランスとドイツでも類似の組織が同様の活動を行っていた。1882年に創立されたSPRの会員たちは、1920年の『タイムズ』紙の記述によれば「あらゆる種類の学術関係者たちであり、哲学者、聖職者、政治家、科学者などがある」〔注29〕。有名会員としては1901年から1904年まで同会会長をつとめた物理学者オリヴァー・ロッジや後年熱心な心靈術擁護者となったアーサー・コナン・ドイルがいる。他の指導的立場の人物たとえばフランク・ポドモア（1856～1910）などは懐疑的姿勢を貫いており、大部分の霊媒は詐欺師そのものと見なしていた。ゆえにポドモアらは霊媒よりも幽霊現象を調査対象としている。人々がテレパシー的幻覚として死者に遭遇しているのではないかと想定して多大な時間とエネルギーを費やしていた。こういった調査にもドイルは参加しており、両者はテレパシー存在の確固たる証拠に関しては同意している。後述するように、1914年から1918年にかけて兵士とその家族親戚からもテレパシー関連の証言が求められることになる。戦争とオカルトに関する他の局面も協会会員の調査対象であった。1916年、大戦勃発後に発表されたさまざまな予言の類をざっと調べたドイツ出身のオクスフォード大学の哲学者フェルディナンド・カニング・シラーいわく「われわれの社会は正統科学のごみの山を熊手で丁寧にならしていくという喫緊の目的のために存在しているといえる。およそありえないような場所からでも真実を探し出すための調査にひるんではならない」とはいえシラーは戦争予言にはなんら見るべきもの

がないと結論している。「実際の話として、証言があまりにひどいためさらなる調査の価値などないといわざるを得ない。大部分は無責任で典拠もなく、検証もできない匿名の噂話でしかなかった」〔注30〕。この結論に関してはほどなくもう一度触れることになる。

1915年、フランス社会学の開祖として著名なエミール・デュルケーム（1858～1917）がドイツの戦争姿勢を分析する安っぽい小冊子を書いている。かれにとつて、この戦争は明らかにドイツが患う社会的疾病すなわち「国家規模の意志偏執」の産物であった。ドイツは主権に対する渴望を正当化するべくあらゆる事項に対して自己の優越を主張し、その裏付けとして民族や歴史や伝説を持ち出す。「かくして生まれたものがさまざまな形の汎ドイツ神話であり、ときに詩歌に、ときに科学になったりするのである」〔注31〕。デュルケームのような有名学者や作家は無数にいる。政府に誘われれば喜んで手のひらを返してこの種の反独プロパガンダを書くのである。新興の社会科学は敵国の人種劣等と疾病的利己主義を解説する「権威」として厚遇された。敵国の脆弱と道徳的退行を特徴づける簡易な手段として「迷信にとらわれている」という非難が両サイドで用いられている。

新聞が学界からヒントを貰うこともあれば、ときにその逆もある。新聞は敵国の愚かな迷信に関する記事の宝庫であった。大戦初期の頃から連合軍の報道はドイツ皇帝の迷信深さをあれこれ紹介して読者を楽しませていた。ゆえに1914年11月、ベルギーの新聞が「ドイツ皇帝は邪眼を恐れ、13は不吉な数字と信じている。皇帝の書齋には手相占いその他のオカルト本のコレクション一式がある。皇帝はあらゆる予言で頭を悩ましている」などと書くのである〔注32〕。『サンダーランド・デイリーエコー』紙の1914年10月の記事いわく「英国の農村部ですら廃れて100年たつような迷信の類が、いま頃になってドイツの『教養』ある軍人のあいだで流行している。ドイツ兵はほぼ全員、なん

らかのお守りを身に着けているといつてよい」。同紙が紹介している例は下着に蝙蝠こうもの翼を縫い付けているオーストリア・チロル地方出身の兵士たちの話であった〔注33〕。ドイツとオーストリア・ハンガリーの新聞も似たようなプロバガンダ記事を掲載している。

戦争がもたらす心理的緊張が原始的信仰の復活につながるという点に留意しつつも、フェルディナンド・シラーは語る。「連合国側が自らの正当性を誇示するために超自然的な作り話を流布させるのも、ドイツが人形に釘を打ち込む魔術作業に復帰するのと同様に自然な成り行きであったといえる」〔注34〕。この記述では「復帰」という言葉がきわめて重要である。当時、ドイツ当局が「釘人形」を創り出すことで異教への復帰を奨励しているという刺激的な告発が学界方面で盛んに行われており、シラーはそれに言及しているのである。1915年から1916年にかけて、何百体もの木製モニュメントがドイツ中の街や村の公共広場に登場している。その多くはカール大帝のようなドイツの英雄たちであり、また鷲、獅子、十字架、潜水艦といったものもあった。その横ではそれぞれ値段が違う鉄、銀、金の釘が販売されていて、市民や兵士がそれを購入して木像に打ち込むのである。これは愛国的戦争支援の公開儀式であり、戦争未亡人や孤児、傷病兵や赤十字への義援金を募ることを目的としていた。もっとも豪華な釘人形は全高12メートルのパウル・フォン・ヒンデンブルク将軍（1847-1934）の木像であった。それはベルリンに設置され、周囲に足場が組まれているので民衆は胴体のうえのほうまで釘を打つことができた〔注35〕。

1915年10月、フランスの『ル・タン』紙がスウェーデンの民族誌学者ニルス・エドヴァルド・ハマルシュテッドの見解にもとづく木像起源説を紹介している。いわく釘人形の流行は捧げものによって神をなだめたいとする基本的人間的欲求の現代的表出であるという。あるいはこれは原初的な魔

術行為であって、釘を購入して打ち込む人々は超自然的な恩恵を被りたいと心のどこかで願っているとしている。そう引用しつつも、『ル・タン』紙サイドはハマルシュテッドがドイツの釘人形の邪悪な意味とその重要性を理解していないと見ていた。「木像の設置と釘打ちは偶像崇拜の奇怪な残存を形成している」と記事は結んでいる〔注36〕。この問題は1916年に高く評価されている学会誌『人類学』でも取り上げられている。フランスの指導的人類学者ルネ・ヴェルノー（1852-1938）はとある記事にてヒンデンブルクの木像をロアング（現在の西ガボン）のフェティシズムと比較している。さらに比較を推し進めるのは容易だが、木像に釘を打ち込むアフリカの宗教行為とドイツのそれのあいだに基本的類似があるとヴェルノーは信じていた。ドイツ国は国民のあいだに古代崇拜体制を再確立させていると皮肉られた。ヴェルノーはまた、木像に釘を打ち込んでいる人は、自らの行動を愛国的娯楽の一種としか思っていない人も多いことに気づいている。しかし木像にお参りする「素朴な人々」は、像に釘を打つという余計な手間をかけることで超自然的援助を期待し、なにとぞ願いがかないますようにとドイツの偶像に愚かな祈りを捧げているのである。ヴェルノーが不安に思うのはこの点だった。「われわれの敵は文明の勝利の邪魔をしている」とかれは結論してる〔注37〕。スイスの考古学者にしてフォークロア研究者ヴォルデマー・ディオナは人形や樹木への釘打ちに関してより意味深な視座から対応している。交戦各国がほぼすべて同様の民間儀式を行っているというのである。それでもディオナの結論は、1915年から1916年にかけての「釘人形」は古代樹木崇拜の残響であり、「きわめて古い迷信が20世紀になっても存続している。その復活が戦争によって推進されているのであり、交戦陣営の神秘的あるいは妄信的側面を強化しているのである」〔注38〕。

BERLIN. Der eiserne Hindenburg.

V. Oberkommando 3. I. 16
genehmigt

Höhe: 13 m — Kopfhöhe:
1,35 m — Durchm.: 3,14 m
— Grösster Umfang: 9 m —
Gewicht: 26000 kg. Erlenholz
und 7300 kg. Eisen-Kon-
struktion. — Zur Benagelung
sind 14000 kg. goldene, sil-
berne und eiserne Nägel be-
reitgestellt.



図1 ベルリンに設置されたパウル・フォン・ヒンデンブルク将軍の全高12メートル釘人形。民衆が募金がわりに釘を購入して打ち込む。

本書は戦争によって「迷信的なもの」への知的関心が刺激されるさまを概観し、大戦の超自然的側面を暴露して解釈しようとする歴史家が直面する試練に光を当てるものである。どうすれば初期の学術関係者がなした思い込みやプロパガンダ、神話創作や大衆迎合というジャングルを切り開いていけようか？ 手始めに筆者はこの時期の文献に浸透していて現在でも心理学者が無批判に使用している「迷信」という言葉を使わないことにする。登場させる際は「」でくくって他者の意見であることを明確にする。魔女術と魔術の歴史家たちは昨今このあたりに敏感であり、過去そして現在でも「迷信」が不合理で無知で虚偽の信仰活動を示す言葉として広く使われていることを意識している。宗教改革後はプロテスタントがカトリックの儀式と神学を貶める用語となった〔注39〕。かようにいろいろな意味を背負った言葉であるから、前後関係を明確にして過去にどのような意味で理解されていたのか、どのように用いられたのかを知る必要がある。筆者は、本書で探求する信仰や活動が退行や妄信を示すものという見解を有していない。本書を読み進めば判明するが、お守りを携帯したり幸運の儀式を行う人々、占い師のもとに通ったり幽霊を見たと主張する人々はしばしば高等教育を受けており、自分の行動や経験を自己分析する思慮深い人物であった。およそ「迷信深い」人々ではないのである。

戦時中の信仰や実践活動を明らかにする資料としては、当時の学術研究以外にも貴重な情報源がさまざまなレベルで存在する。当時の新聞は、プロパガンダに関してはいくつかの命令で動く道具にとどまっただけではない。自国の非正統的信仰や実践活動に内省的かつ批判的な視線を向ける場合も多く、超自然現象とおぼしきものを報道したり、あるいは富国強兵や国威昂揚に寄与しない民間魔術の類を叩いたりしている。前線からの手紙、あるいは前線に送られる手紙からもユニークな観点が得られる。し

かし第一次大戦の歴史家たちが長らく議論しているように、そういった書簡類は軍の検閲および兵士自身による忖度そんたくによってそれ自体が手ごわい壁となり得るのである。兵士たちが抱く恐怖や想像、そして儀式に関して、家族や愛する者たちに隠しておきたいものはないものだったのか？ 戦中そして戦後、個人的あるいは家族的理由で破棄された書簡もあったはずである〔注40〕。戦場回想録もまた文芸ジャンルとして確固たる地位を得るようになった。戦時中に記されたものもあるが、多くは数十年後に発表されている。個人的回想に富み、塹壕におけるはらわたをえぐられるような経験や空中戦がいきいきと描かれていて、しかも著者たちは感情の起伏に関してしばしば驚くほど率直である。なかには戦死者の霊が霊媒を通じてあの世から送ってきた回想録とされる書物まである。もちろんこの種の個人的情報源は第一次大戦従軍者のほんのごく一部の人間のものであって、大多数の兵士が読み書きができなかったことも忘れてはならない。1915年のイタリアでは国民の識字率は65パーセントだが、南部農村地域では数字はずっと低くなる。ロシアでは労働人口の3分の1が基本的読み書き能力に問題があった。英国の識字率は高かったが、植民地で徴募した英国軍兵士たちとなると数字は各段に落ちる〔注41〕。塹壕はマルク・ブロックが描いたような口頭伝承の封印世界ではなかったであろうが、文字や印刷物として残っているものだけが戦場フォークロアや超自然体験の豊かさや複雑性を描き出しているわけではないという点にも留意する必要がある。

第一次大戦終結後、両陣営でおよそ半世紀以上にわたって帰還兵を対象とする何千もの口頭取材が行われている。兵士の宗教観に関する質問もあったが、大部分は戦闘や戦場における肉体的側面に集中している。塹壕におけるユーモア、退屈、些事がときおり加わり、信仰や伝統に関する回想はたまに話のついでに顔を出すといった程度だった。たとえば英国フュージャリア連隊のジェイムズ・ガウ・

クーパーは1973年、西部戦線に関して取材された際に回想している。あるとき芝生に座ってぼんやりしていると、肩に蜘蛛が乗っていることに気がついたという。振り払おうとすると別の兵士から「蜘蛛をたたくな、このばかやろう。それは幸運のあかしなんだ」と怒鳴られてしまった。そういわれてもクーパーは蜘蛛を払い落としたのだが、ほどなく砲弾が落ちてきて周囲の兵士は全員死亡してしまった。蜘蛛のことで注意してくれた兵士も死傷者のなかに混じっていたという〔注42〕。口頭伝承の常ではあるが、記憶は取捨選択されるものであるし、出来事から数十年が経過すると多少なりとも重要と思われるものだけが議論の対象となる点にも注意が必要である。他の情報源は、戦時における一般大衆の精神状態に関してもいわぬ証言者というところであろう。チャーム、護符、マスコット、幸運の手紙といった物品文化は具体的な「もの」の価値を思い知らせる存在である。抽象的な愛や保護といった観念は、物品に対する感傷的執着のままで効力を失う。安っぽい大量生産の装身具が修羅場をくぐって大いなる力の護符となり、教会が配布する聖なる物品は戦争という炉のなかで俗世の力を発生させていくのである。

思考、体験、報告、回想、想像、そして物品といった無数の断片をつなぎあわせていくと、超自然的連想をまとう戦争という印象的かつ啓蒙的な絵画が浮かび上がる。そしていま取り組むべき任務は、ひとつひとつの意味を解明していくこと、そして第一次世界大戦中の生活を理解するうえでなぜそれが重要なのかを明らかにすることである。

「東方の星」団 67, 130, 131, 310

な

ナチス 71, 215, 216, 310, 311, 313, 316, 321,
330, 331

偽霊媒取締法 323-4

日食／月食 52, 54, 57

日本 323

ニューソート 285-300

猫 46, 195, 199, 219, 222-5, 237, 246, 319, 327

ネネットとランタンタン 235-42, 243-4,
326, 332

は

バッジ 204, 215, 216, 224, 229, 278, 279,
283, 284, 285, 320

ヒンドウ 148, 158, 215, 291, 300

ヒンメルスブリーフ 257-65, 320

ファァティマの手 200, 202

ファムズアップ 231-4, 240, 246

福音主義 62-4, 70, 73, 77-8, 85, 87, 90, 112,
244, 248, 249, 250, 251, 254

豚 40-1, 198, 219, 220, 284

ブルドッグ 221-2

浮浪者取締法（1824） 146, 154-5, 156, 158,
159, 160, 169, 171, 173, 176, 178, 179, 182

平和主義 114, 115-7, 159, 285

ベルマニズム 298-300

防弾聖書 251-7, 328

ま

魔女（-術） 8, 9, 15, 26, 145, 178, 202, 204,
211, 244, 258, 305, 306, 307, 308, 323

魔女術取締法（1736） 177-83

マルヌ会戦 34, 94-5, 281, 282

メゾナー 301, 304, 320

メダイ 244, 270, 274-6, 277-8, 279, 281,
282, 302, 304, 320

（ヨハネの）黙示録 35, 61, 62, 63, 65, 66,
70, 73, 75, 77, 109, 112, 249

モンスの戦い 81, 89, 90, 105, 123, 196

モンスの天使 10, 12, 89-92, 94, 95, 104, 115

や

幽霊 8, 10, 15, 21, 26, 40, 81, 92, 102, 103-10,
113, 127, 313, 323

ユダヤ 149, 180, 216, 226, 300, 301, 304, 315,
320

ユトランド沖海戦 139

ユニティー運動 290-3

指輪 174, 199, 202, 221, 267

夢 59, 61, 93, 133, 135, 137-8, 139, 148, 149,
153, 246, 313

予知 16, 61, 78, 134-40

予兆 15, 17, 30, 36, 50, 52, 61, 93, 96, 107,
112, 137, 306, 313, 314, 315

ら

卵膜（羊膜、コール） 208-10

良心的兵役拒否 114, 116-7, 181, 285

ルシタニア号 75, 196

ルルド 93, 98, 278, 279-30, 281, 317

霊視 44, 66, 70, 82, 127, 134, 143, 144, 145,
150, 158, 159, 161, 172, 173, 176, 178, 183, 184,
188, 189, 190

ロザリオ 97, 270, 274, 275, 278, 279, 320

Y

YMCA 251, 254, 298

291, 295
クルアーン 301-3
クロヴァー (シャムロック) 201, 210-4,
231, 268, 304, 319, 325, 332
検閲 14, 17, 27, 30, 39, 118, 269, 285, 303
コウノトリ 219-20
交霊会 110, 112, 113, 119, 122-6, 175, 184, 308,
309, 320
骨相学 168-71, 172, 183, 323
ゴリウオーグ 225, 237, 239, 319, 327

さ

サイコメトリー 172-5, 183, 188
催眠 111, 121, 167, 188-9, 286, 297
猿 218, 219, 244, 303
死後 (の世界) 108-10, 114-5, 124, 127, 141,
324
思念 (力) 50, 67, 129-31, 132-3, 295-7
十字 (- 架) 23, 44, 83, 96, 98, 199, 247, 271,
272-4, 276, 279, 282, 314, 328
出現
キリストの—— 83, 101, 283
聖母マリアの—— 93-8, 140, 275, 311
ファティマの—— 96-8
シュツプリーフ 262-5, 320
植民地 16, 20, 27, 64, 97, 220-1, 300, 303,
322
白い仲間 98-103, 115
神智学 (協会) 53, 54, 66-70, 72, 123, 129,
130, 131, 291, 310
人智学協会 72, 310
新聞 14, 22-3, 26, 324
——と数秘術 194
——と占星術 52-3, 171, 322
——と占い 142-3, 148, 155, 158, 160-1,
162-3
心霊術全国ユニオン (SNU) 111, 115, 116-
7, 118, 175, 180-1, 308-9, 313

心霊調査協会 (SPR) 21, 92, 127-9, 138-9,
162, 310
水晶球 144, 150, 176, 183, 185, 187-8
数字 (幸運数／不吉数としての)
3 194-5, 321
13 (13恐怖症／トリスカイデカフォビ
ア) 193-4, 195-6, 247, 319
666 (獣の数字) 73-7
数秘術 49, 77, 321, 323
スカブラリオ 270, 277-9, 283
聖心 278, 279, 282-5, 320
世界的兄弟会 68-9
赤十字 23, 54, 128, 156, 213, 224, 225, 243
潜水艦 (U ボート含む) 7, 9, 23, 34, 35, 83,
97, 105, 122, 197, 209, 210, 287
占星術 30, 32, 34, 49, 52-60, 77, 79, 80, 143,
144, 146-8, 150, 152, 157, 158, 163, 165, 171-2,
179, 183, 305, 311-3, 314, 321-2, 323, 330
戦争神経症 11, 12, 100, 102-3, 176, 182, 189,
299, 311
象 220-1, 237, 303, 319
ソナムの戦い 124, 131, 275, 289

た

タッチウッド 225-35, 237
チェーンレター 265-7, 316-8
治療 (ヒーリング) 87, 93, 133, 252, 258,
270, 287, 288, 291, 292, 295, 311
通信販売 146-8, 158, 171, 198, 312
ツェッペリン飛行船 9, 13, 35, 87, 134, 199,
215, 295
蹄鉄 198, 199, 202, 203, 204-5, 211, 232, 242,
244, 246, 318, 319, 325, 332
手相 22, 44, 45, 46, 48, 49, 52, 53, 143, 144,
145, 148, 149, 150, 154, 156, 158, 168, 169, 171,
182, 183, 184, 186, 187, 278, 323
天使 70, 85-92, 117, 123, 133, 151, 174, 199,
201, 270, 314

ヨナ 196-7, 319

ら

ライト、A・R 312, 318
 ラスウェル、ハロルド 78-9
 ラッセル、チャールズ・ティーズ 63-4
 リシエ、シャルル 134-5, 138
 リスト、グイド・フォン 71
 リーベンフェルス、イェルク・ランツ・
 フォン 71-2
 リンド＝アフ＝ハーゲビー、ルイーズ・
 リジー 131-2
 リントン、ラルフ 16
 レオ、アラン 54, 60, 146-7, 171-2
 レゼム、W・H 99-100
 ローヴェット、エドワード 20-1, 198, 202,
 207, 208, 209
 ローウェル、ジェイムズ・ラッセル 31
 ローゼン、エリック・フォン 216-7
 ローソン、フレデリック・ローレンス
 50, 132, 293-8
 ロッジ、サー・オリヴァー 21, 123, 124-5,
 172, 176, 177-8, 179, 308, 310
 ローバート、ジョン・ゴドフリー 112, 126
 ロレン、エミール・マリイ 153-4, 160-1
 ロレンス、T・E 301-2

わ

ワイセンベルク、ヨーゼフ 70-1

事項索引

あ

アニユス・デイ（神の子羊） 274
 アルマゲドン 32, 61-72, 112, 315
 アルマナック 49, 50-1, 56, 57-9, 79, 80,
 143, 148, 149, 183, 221, 312, 314
 イスラム 249, 282, 300, 301-3
 犬 218, 222, 237, 242, 244, 261-2
 イーブルの戦い 87, 191, 202, 205, 206, 256,
 274, 289
 ウイジャ盤 126
 ヴェルダンの戦い 30, 37, 38, 135
 ウサギの足 205-6, 319
 英国国教会 36, 66, 85, 87, 90-1, 92, 112,
 114-5, 133, 141, 244, 249, 254, 272
 エリトスゼル 242-4, 326
 絵葉書 83, 85, 86, 193, 199-1, 204, 212, 217,
 219, 220, 221, 224, 237, 242, 243, 325-6
 エホバの証人（ものみの塔協会） 63-4,
 285
 オカルティストたちの平和連合（OPU）
 132
 オスマン帝国 32, 249, 300, 302

か

鉤十字（スワステイカ） 199, 214-8, 319,
 327
 火星 43, 52-3, 57, 60, 330
 カード占い 45, 53, 143, 144, 148, 149, 150,
 152, 153, 156, 171, 183, 184, 187-8, 269
 カニングフォーク 151, 268, 270, 308
 貨幣（金貨、銀貨、銅貨、コイン等）
 202, 203, 204, 205, 207, 267, 319
 カルマ 66, 67, 69, 70, 71, 77
 釘人形 23-5, 240
 クリスチャン・サイエンス 132, 286-90,

デュルケーム、エミール 22
東条英機 323
ドーザ、アルベール 14-5, 17, 18, 19
トラヒテンベルク、ヨシュア 301
トルストイ、レフ 49
ドレスラー、フレッチャー・バスコム 12
トロッター、ウィルフレッド 13

な

ノストラダムス 32-5, 37, 315, 322, 329
ノートン、クレメンティーナ 43, 161, 187

は

ハースト、ウィリアム・ランドルフ 294
パーソンズ、チャールズ 193, 223, 237, 239,
246-7, 275-6
ハーディー、トマス 113
バハーオッラー 32
バビュス（アンコース、ジェラル） 49
バリ、J・M 108-9
バルフォア、アーサー 177
ヒトラ、アドルフ 311, 315, 316, 320-1, 322,
329, 330, 331
ヒムラー、ハインリヒ 321
ヒンデンブルク、パウル・フォン 23, 24,
25, 240
フィルモア、チャールズ／マートル 290-1
フェルジョー、クレール 283
フォス、ヴェルナー 216
ブライス、ハリー 310
ブラヴァツキー、ヘレナ 66, 72
ブラウト、パウル 11
ブランドラー＝ブラクト、カール 53-4
ブランドン、ヘンリー（ボクランセ、ハ
イマン） 226, 227, 228, 229, 230, 245
ブルース、ジェイムズ 149
ブルースト、マルセル 48

ブルボ、フランシスク 237
プロヴォー、ジャンヌ 227
ブロック、マルク 14, 27
プロディー＝イネス、J・W 132-3
ベタン、フィリップ 271
ベックマン、マックス 61-2
ベッケル、ヴィルヘルム 53-4
ベヒトルト＝シュトイブリ、ハンス 17,
269
ベラダン、ジョゼフ 74, 75
ヘルヴィヒ、アルベルト 155
ボディー、アレクサンダー・アルフレッド
85, 87-8, 90-1, 113
ボトムレイ、ホレイショ・ウィリアム
76-7, 79, 114
ボドモア、フランク 21
ホフマン＝クライヤー、エデュアルド 17
ボボラ、アンジェイ 39, 315
ホール、グランヴィル・スタンリー 12

ま

マシ、ドラガ 48
マスターマン、チャールズ 154-5
マダム・ド・テーベ 45-52, 79, 114, 149, 152,
221
マダム・フレイヤ（ダンコース、マリー・
ヴァレンティン） 44-5, 48
マダム・メイ（エヴァンス、マダム・ス
ミス） 159-60, 172, 187
マッケン、アーサー 89-90, 91, 92
マッケンゼン元帥 60
マリー、ギルバート 162-3
マレット、ロバート・ラヌルフ 19
ムーア、フランシス 56, 57, 58, 59, 150, 314
ムッソリーニ、ベニート 10, 202, 275, 329
メーテルリンク、モーリス 29, 31, 41
モントモレンシー、ルバート・ド（ザ・
ラジャ） 146, 157, 186

人名索引

あ

- アイゼンハワー、ドワイト 319
アウダ・アブー・ターイ 301-2
アスキス、ハーバート 154
アポリネール、ギョーム 194
ヴィアンネ、ジャン＝パティスト 41
ヴィルヘルム2世（ドイツ皇帝） 13, 22,
32, 34, 44, 51, 54, 57, 59, 73-8, 112, 121, 148,
152, 199, 212-3, 221, 262, 294, 320
ウェイト、アーサー・エドワード 29, 38
ウェーバー、マックス 7-8, 9
エディー、メアリー・ペイカー 286, 287,
295
エドワード8世（英国王） 214
オーテン、アーネスト・ウォルター 180-1
オドネル、エリオット 113, 127

か

- ギブス、フィリップ 192, 201, 202, 296
キプリング、ラドヤード 108, 215
キャリントン、ヒアワード 127, 135
ギャレット、ガートルード 145, 156, 171,
187
ギンヌメール、ジョルジュ 192-3, 219
クインビー、フィニアス 286
クリシュナムルティ、ジッドウ 66, 72, 310
クルーゼ、ヨハン 8, 307
クロウリー、アレクスター 43
ゲッベルス、ヨーゼフ 321-2
ゲーリング、ヘルマン 216-7
ゲルナル（またはゲルナット）、アンリ
154
コナン・ドイル、アーサー 21, 43, 117, 123-
4, 172, 176, 308
コロソ、ラファエル 18-9

さ

- サイモン、サー・ジョン 177-8
サウスコット、ジョアンナ 35-7
ザズラ（クリフトン、アーサー・ドルー）
157-9
サスン、ジークフリート 108
ジェメリ、アゴスチノ 18, 203
シスター・テレーズ 84, 281-2
シネット、アルフレッド・パーシー 67-
8, 129
シャーレイ、ラルフ 36, 60, 74, 75, 330
ジャンヌ・ダルク 120, 266, 275
シュタイナー、ルドルフ 72
シュレンク＝ノッチング、アルベルト・
フォン 310
ジョフル将軍 94, 120
ジョーンズ、アーネスト 246
シラー、フェルディナンド・カニング
21-2, 23
シン、ゴーヴィンダ 103
スコベレフ、ミハイル 102-3
スタイン、ガートルード 315
ステッド、W・T 43, 172
聖オディール 37-8, 315
聖クリストファー 276-7, 320
セファリアル（オールド、ウォルター・
ゴーン） 54, 59

た

- ダンカン、リー 242
ツァドキエル（モリソン、リチャード・
ジェイムズ） 56, 58, 59
ディアロ、バカリー 303
デマル＝ラトゥール、A 33-34
テューダー・ボール、ウェルスリー 32, 70
デュマ、アレクサンドル（小デュマ）
46, 48

オーウェン・デイヴィス Owen Davies

ハートフォードシャー大学教授（社会史）。魔女、魔術、幽霊、民間療法、グリモワール（魔術書）について幅広い研究を行っている。著書に『世界で最も危険な書物—グリモワールの歴史』（宇佐和通訳、柏書房、2010）、*Paganism: A Very Short Introduction* (2011)、*Magic: A Very Short Introduction* (2012)、*America Bewitched: The Story of Witchcraft after Salem* (2013)、編著に *The Oxford Illustrated History of Witchcraft and Magic* (2017) がある。

訳者

江口之隆 えぐち これたか

1958年、福岡県生まれ。魔術研究家、翻訳家。主な著書に『黄金の夜明け』（亀井勝行との共著、国書刊行会）、『西洋魔物図鑑』（翔泳社）など、訳書にリガルディー編『黄金の夜明け魔術全書』、クロウリー『新装版777の書』（いずれも国書刊行会）、シセロ夫妻『[黄金の夜明け団] 入門』、イェンセン『ウェイト＝スミス・タロット物語』（いずれもヒカルランド）などがある。フォロワー数6万人超のTwitterアカウント「西洋魔術博物館」を主宰。魅惑的な西洋魔術の世界に関するウィットに富んだ情報発信で幅広い層の人気を呼んでいる。

HP : <http://www.elfindog.sakura.ne.jp>

Copyright © Owen Davies 2018

A SUPERNATURAL WAR: MAGIC, DIVINATION AND FAITH DURING THE FIRST WORLD WAR, FIRST EDITION was originally published in English in 2018. This translation is published by arrangement with Oxford University Press. Hikaruland is solely responsible for this translation from the original work and Oxford University Press shall have no liability for any errors, omissions or inaccuracies or ambiguities in such translation or for any losses caused by reliance thereon.



スーパーナチュラル・ウオー
第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰

第一刷 2020年4月30日

著者 オーウェン・デイヴィス

訳者 江口之隆

発行人 石井健資

発行所 株式会社ヒカルランド

〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11 TH1ビル6F
電話 03-6265-0852 ファックス 03-6265-0853
<http://www.hikariland.co.jp> info@hikariland.co.jp
振替 00180-8-496587

本文・カバー・製本

DTP

編集担当

中央精版印刷株式会社
株式会社キャップス

小澤祥子

落丁・乱丁はお取替えいたします。無断転載・複製を禁じます。

©2020 Eguchi Koretaka Printed in Japan

ISBN978-4-86471-865-3